

附属間連携研究「環境」

増田 伸江（お茶の水女子大学附属小学校）

1. はじめに

二年目の研究では、ナーサリーから附属幼稚園・小学校・中学校・高等学校まで、全ての附属校園の先生方がグループに参加することになり、0歳児から18歳までの子どもの成長を見通して、自然環境との関わりが与える影響について調査研究を行うことを目指した。異校種の教員同士が互いの園舎や校舎を歩きしながら、年齢に応じた実践を報告し合い、子どもの成長や学びの履歴を共有することによって、具体的な変容を認識し、豊かな自然環境が育む情操豊かでかつ科学的な好奇心旺盛な子ども像を明らかにしていくように研究を進めた。

2. 研究の実際

○ナーサリー、附属幼稚園訪問

幼稚園の園庭を「環境」のメンバー全員で散策し、畑の野菜の苗・毎年作る筍汁のタケノコ・藤棚・シダレザクラ・大イチョウを観察し、自然と触れ合い自由な時間の中で、思う存分納得がいくまで自分の遊びを極めている子どもたちの様子が伺えた。

ナーサリーは温かみのある樹の造りで、純粋な目でじっとみつめてくる乳幼児の可愛らしさと、建物内のあらゆるもののサイズの愛らしさに、他校園の者は感動。

○プロジェクトワイルド・ネイチャーゲームの体験

五感で自然を感じ、自然との一体感によって気づきを深めていくことが目的。感性を重視しながらシミュレーションやゲームなどの体験から自然界の法則などを知ることでもできる。「わたしの木」「オーディア」を体験。

○「フクロウの営巣とフクロウの赤ちゃん」・・・2009年3月～5月、長野県北軽井沢にて撮影

巣箱の中に設置されたビデオカメラの遠隔操作によって、フクロウの営巣から、卵の孵化、巣立までの雛の成長を撮影し、それを子どもたちに見せ、学校のワークスペースにフクロウコーナーを設け、図鑑やフクロウの剥製を置き、子どもの興味関心を喚起。

○夏の現職研究の分科会開催

- ・大学キャンパスの散策（専門家による説明あり）
- ・附属小学校実験観察室にて採集した植物のスケッチ
- ・附属校園における環境教育の実践報告となる展示物の掲示

○「環境」が子どもに与える影響についての個別調査

- ・ナーサリー：日々お散歩に出かけドングリを拾ったり、ダンゴムシを見つけたりしたことが記憶として残る。いつものルートにこだわったり、1歳のころの散歩の記憶がある子供がいる。自分にとっての大切な記憶が同じ場所にやってきて蘇るのではないだろうか。貴重な思い出を想起させ、育んでいるのが環境ではないだろうか。
- ・附属幼稚園：あえて網を使わずに虫かごでチョウやバッタをつかまえ、子どもの発案で教室を丸ごと「チョウハウス」にし、他のクラスの子どもたちを招待した。また、種から育てたヒマワリが大きく成長し、たくさんの種が収穫できたことから「種の博物館」を開催。
- ・附属小学校：附属幼稚園出身の子どもが、幼稚園の園庭にあったカキの木と同じ木を、小学校でも見つけ、春先にたくさん落ちる小さな青いカキの実を拾い、朝のスピーチで紹介した。そのことに触発され、校庭での木の実拾いがクラス中に発展した。自然環境を介した、子どもどうしの関わりの深まりの事例を研究。
- ・附属中学校：自主研究のテーマが「理科一般」の生徒をデータベースで検索（1980～2008年、432件）し、「大学構内の食虫植物」「大学キャンパスの鳥のラインセンサス調査」「大学キャンパスにある薬草をボタニカルアートとしてまとめる」など大学キャンパスをテーマにした生徒の自然科学への関心の広がりについて調査。
- ・附属高校：卒業生で、大学院進学予定で現在理系の大学4年生の「理系の道を歩むまで」というレポートより、附属小・中・高時代の、理科・算数・総合・自主研究・化学の実験三昧などが、理系選択に与えた影響を分析。

○アンモナイトのレプリカ作り

紙粘土を使い、幼稚園児から高校生まで楽しめる教材の紹介。

○天体望遠鏡による冬の三日月と木星、スバルの観測

3. 研究の成果と課題

附属小・中・高共通のアンケート調査と個別の聞き取りや追跡調査を実施し、環境が子どもに与える影響や、環境と子どもの人格・自然科学への興味関心との相関性などを分析し、よりよい環境を子どもに提示し、また、授業にも環境を取り入れた実践をしていく必要を感じる。また、自然環境を介した幼児・児童・生徒間の人間関係の構築など心理的な影響も今後の研究課題となるであろう。